

- ▶ 当時は若山と呼ばれたこの地に秀吉が築城を命じ、自ら虎伏山を城地に選定し縄張りを行いました。普請奉行に築城の名手・藤堂高虎を命じ、補佐役に羽田一庵を任じて、僅か1年で完成させました。  
慶長5年(1600)関ヶ原の戦いの後、桑山一晴が紀伊和歌山2万石を与えられます。しかし、すぐに大和新庄藩に転封となり、浅野幸長が37万石を与えられ、紀州藩主となり入城しました。元和5年(1619)浅野氏は広島藩に加増転封となり、徳川家康の十男・頼宣が55万5千石で入城し、御三家の紀州徳川家が成立しました。



13 第8代将軍 徳川吉宗像

- ▶ 徳川吉宗は、徳川御三家の紀州藩第2代藩主 徳川光貞の四男として生まれました。父と2人の兄の死後、紀州藩主に就任し藩財政の再建に努め成果を挙げました。第7代将軍 徳川家継の死により徳川將軍家の血筋が途絶えると、先々代の6代将軍家宣の正室である天英院に指名され、第8代将軍に就任。宗家以外から初めて将軍が誕生しました。紀州藩主時代の藩政を幕政に反映させ、第6代将軍 家宣時代の正徳の治を改める幕政改革を実施。幕府権力の確立に務め、増税と質素儉約による幕政改革、新田開発など公共政策、公事方御定書の制定、目安箱の設置などの享保の改革を行いました。



第8代将軍 徳川吉宗像





## 14 第8代将軍 徳川吉宗生誕の地

和歌山市吹上2-4

- ▶ 徳川吉宗の母は紀州徳川家の召し使いで、巨勢六左衛門利清の娘・浄円院(於由利の方)。紀州藩主の母・側室の実家としては、身分が違いすぎたといわれます。和歌山城の大奥の湯殿番であった於由利の方は、徳川光貞の目に止まり、湯殿において手がついたという伝説は有名です。母の身分に問題があったためか、幼年は家老の元で育てられ、やがて城中へ引き取られました。



## 15 陸奥宗光生誕の地

和歌山市吹上3-2

- ▶ 陸奥宗光は前述の通り弘化元年(1844)、紀州藩士 伊達宗広の六男として生まれました。

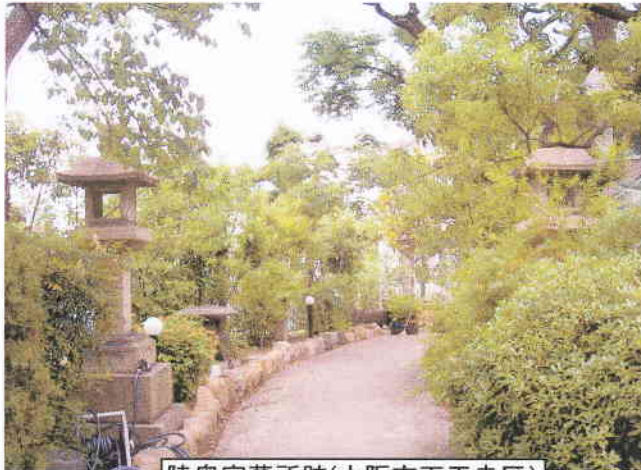


陸奥宗光

**伊達宗広** 享和2年(1802)5月25日 - 明治10年(1877)5月18日  
文化13年(1816)、藩主 徳川治宝の小姓を任じられます。治宝はその宗広の才能を評価し18歳で藩の監察に任じます。その後、勘定吟味役、勘定奉行、寺社奉行兼務と昇進して500石取りとなります。家老山中筑後守を補佐して藩政改革を推進する一方で、藩内の尊王論を主導していきました。嘉永5年(1852)に山中筑後守、更には藩主 治宝が相次いで病死すると、改革に反対する派が推す家老水野忠央が実権を握ります。幕府からの信頼も厚かった水野は、藩内に危険な思想を広めたとして宗広を捕え、10年近くにわたって紀伊国田辺に幽閉されました。文久元年(1861)、その才能を惜んだ土佐藩 山内容堂の口利きによって釈放されると、養子 宗興に家督を譲って隠居します。翌年、宗興とともに脱藩して上洛、尊皇攘夷運動に参加します。紀州藩は激怒し元治2年(1865)に和歌山に連れ戻され、再び幽閉の身となります。明治維新後、実子の陸奥宗光が新政府に出仕すると、明治2年(1869)には幽閉が解かれ、宗興も和歌山藩執政に抜擢されました。紀州藩は過酷な措置を行ってきたお詫びとして隠居料200石を与えました。宗広はその後歌道に専念し、大阪夕陽丘にある歌人藤原家隆の荒廃していた墓を修理し、そのそばの



土地を購入し「自在庵」を設け、家隆の歌にちなんで家隆の墓所と自在庵のある場所を「夕日岡」と名付けました。宗広は明治10年(1877年)5月18日に亡くなり、夕陽丘に埋葬されますが、陸奥宗光も同じ場所に埋葬されました。(昭和28年(1953)陸奥家墓所は現在の鎌倉に移転されています。)



陸奥家墓所跡(大阪市天王寺区)



陸奥家墓所跡に残る宗光最初の妻蓮子の墓碑

## 16 勝海舟訪問の地 淡嶋神社

和歌山市加太116

- ▶ 勝海舟は加太を何度も訪れていますが、淡嶋神社にも訪れています。勝海舟日記に次のような記載があります。

文久二年正月七日

因州候、乗船、紀(州)の加田(港)に到る。友ヶ島へ鯨船にて到り上陸、砲台一見。夕刻、同船にて加田の朝陽船に帰る。これはかねて御船、此島近傍へ迎えとして来るべき約の処、延刻。中途にて乗船の積りなりしに、海路表裏し、中途にて出逢わず、終に夜に入り暗黒如何とも為すべからず。加田港に到り、五ッ時過ぎに上陸、淡島の社中に入り、飢えを凌ぐ。夜九ッ時、朝陽船、友ヶ島を一周し、再び加田港前に帰る。直ちに乗船。

残念ながら淡嶋神社には勝海舟が訪れた記録や言い伝えが残っていないとの事でした。



勝海舟



淡嶋神社本殿



紀文の帆柱

境内には「紀文の帆柱」というものがあります。これは紀国屋文左衛門のみかん船の帆柱です。願い事を唱えながら、この柱の穴をくぐり抜けると、願い事が叶うと言われています。

紀州徳川家は、代々姫君が生まれると雛人形一対を淡嶋神社に奉納することを慣習としていました。淡嶋神社の本殿には、今も供養のために雛人形をはじめ全国からさまざまな人形が奉納され、その数は実に2万體にもものぼります。